

中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係

黒田 祐二¹ 桜井 茂男²

本研究は、中学1・2年生を対象として、友人関係場面における目標志向性（経験・成長目標、評価—接近目標、評価—回避目標）と抑うつとの関係について検討したものである。研究1において、目標志向性を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性が検証された。研究2では、目標志向性と抑うつとの関係を重回帰分析により検討した。その結果、Dweck & Leggett (1988) の仮説通り、「対人的経験を積むことを通して自分を深めようとする」経験・成長目標は抑うつを抑制し、「自分の性格について悪い評価を避けようとする」評価—回避目標は抑うつを促進するが、Dweck & Leggett の仮説に反して、「自分の性格について良い評価を得ようとする」評価—接近目標は抑うつを抑制することが明らかになった。また、評価—接近目標が抑うつを抑制する効果は、2年生よりも1年生において顕著にみられることが示された。

キーワード：目標志向性、友人関係場面、抑うつ、中学生

問題と目的

ストレス社会といわれる現代は、「抑うつ」が生じやすい環境にあるといえる。心理学においてもここ10数年の間、抑うつに関する実証的研究が盛んに行われてきた。これらの研究の多くにおいて、抑うつは、悲哀感・憂うつ感（感情的側面）、否定的な自己認知（認知的側面）、そして、意欲や活動水準の低下（動機づけ・行動的側面）などで構成されるものとして定義されている（Kazdin, 1990；Seligman, 1975 など）。

近年は、子どもの間で抑うつが増加する傾向にあるという（高野, 1995）。村田（1993）は、小・中学生を対象に、抑うつを測定する質問紙を実施したところ、臨床診断において抑うつと推定できる得点（カット・オフ得点）を越えている者の割合は、小学生が13.3%、中学生が21.9%と、かなり高い値であることが示された。また、近年増加している青少年の引きこもりや不登校も、抑うつと関連する重要な問題であろう。このような背景から、子どもの抑うつについての体系的な研究が望まれている。

本研究は、子ども、特に自己意識がかなり発達し抑うつが生じやすくなると考えられる中学生を対象として、友人関係場面において抑うつがどのように生じるかを検討するものである。

これまでの抑うつに関する研究から、抑うつの生起

メカニズムを解明するにあたっては、目標志向性(goal orientation)³からのアプローチが有効であることが指摘されている（Dykman, 1998；桜井, 1995）。目標とは、「行動の目的・意図」や「達成しようとしていること」であり、「個人の認知・感情・行動を方向付けるもの」であると定義される（Dweck, 1996）。本研究においても、Dykman（1998）や桜井（1995）の主張に従い、個人が達成しようとしている目標の違いから抑うつの生起・非生起を説明する。

友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係についてはこれまであまり検討されておらず、主に学業場面において検討されてきた。Dweck & Leggett（1988）によれば、学業場面においては、知的能力を伸ばすことを目指す「学習目標（learning goal）」と、知的能力について良い評価を得て、悪い評価を避けることを目指す「評価目標（performance goal）」の2つの目標があり、前者は抑うつの反応を抑制し、後者はそれを促進すると仮定している。桜井（1995）は、この目標志向性の概念を採り入れつつ、公的自己意識や評価懸念といった日本に特有の文化的特性と、原因帰属を考慮して、独自の抑うつ生起モデルを提唱し、その妥当性を検討している（桜井, 1990, 1993 など）。

Dweck & Leggett（1988）や桜井（1995）によれば、学業場面における目標理論は友人関係場面にも適用で

¹ 筑波大学心理学研究科 ykuroda@human.tsukuba.ac.jp
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

² 筑波大学心理学系 ssakurai@human.tsukuba.ac.jp
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

³ 本研究においては、目標志向性という用語の中の「志向性」という言葉は、目標の「方向性」を意味する。より具体的には、後述するように、経験の獲得や自己の成長を目指すという方向、良い評価の獲得を目指すという方向、悪い評価の回避を目指すという方向を意味する。

きするという⁴。Dweck & Leggett は、友人関係場面においても学業場面と類似した目標志向性を仮定している。すなわち、学習目標に対応する目標としては、「社会的属性（パーソナリティや社会的スキル）を豊かにしようとする」、「対人的経験を積んだり社会的視野を広げようとする」、ないしは「新しい対人関係を構築したり、親密な対人関係を築こうとする」目標を、また、評価目標に対応するものとしては、「社会的属性（パーソナリティや社会的スキル）について良い評価を得て（社会的属性の良さを誇示し他者からそれについて高く評価され）、悪い評価を避ける（社会的属性のまずさが明らかにされるのを避け、他者からそれについて低く評価されないようにする）」目標を取り上げている。そして、学習目標をもつと、友人関係場面においては「相手とうまくやっていくにはどうすればよいか」ということに関心が向かうため、たとえ相手とうまくいかない時でも自分を責めたりすることではなく、抑うつ反応が生じにくくなるという。一方、評価目標をもつと、友人関係場面においては自分の社会的属性についての評価に関する情報（例えば、友人からの拒絶）に敏感になるため、抑うつ反応が生じやすくなると仮定している。

しかしながら、Dweck & Leggett (1988) の友人関係場面における目標理論に関して、評価目標が抑うつをもたらすという仮説については問題点がある。即ち、Dweck & Leggett の理論においては、社会的属性についての「良い評価を得ること」と「悪い評価を避けること」を同じ次元の目標と捉え、両者とも抑うつをもたらすと論じているが、両者を区別して抑うつとの関係を論じる必要がある。

近年、菅原 (1986, 1996) は、承認欲求には、他者からの賞賛を獲得しようとする賞賛獲得欲求と、拒否を回避しようとする拒否回避欲求という、異なる次元の欲求があることを示している。そして、特に後者は、他者からの否定的な評価に敏感にさせ、対人不安を引き起こしやすくさせると論じている (菅原, 1996)。また、Elliot & Harackiewicz (1996) は、学業場面における評価目標について論じる中で、他者より能力的に勝ろうとする目標（評価一接近目標；performance-approach goal）と他者より能力的に劣ることを避けようとする目標（評価一回避目標；performance-avoidance goal）は、達成状況において異なる認知・感情・行動を引き起こす異なる次元の目標であり、両者は区別されるべきであると

主張している。即ち、達成状況において、ポジティブな可能性（他者より能力的に勝ること）に関心を向けると、成功に関連した情報への感受性、やりがいの評価などが高まりやすくなるが、ネガティブな可能性（他者より能力的に劣ること）に関心を向けると、失敗に関連した情報への感受性、脅威の評価や不安などが高まりやすくなるという。

これらの知見を考慮すると、友人関係場面における評価目標は、社会的属性についての良い評価を得るという方向性をもつ目標（Elliot & Harackiewicz (1996) にならい、これを「評価一接近目標」とする）と、社会的属性についての悪い評価を避けるという方向性をもつ目標（同様に、これを「評価一回避目標」とする）とに区別され、評価一回避目標のみが抑うつをもたらし、評価一接近目標は抑うつをもたらさないことが考えられる。本研究の主要な目的は、Dweck & Leggett (1988) の仮説に反して、友人関係場面における評価一接近目標と評価一回避目標が抑うつに異なって影響するかどうかを検討することである。

また、本研究においては、友人関係場面における学習目標、評価一接近目標、評価一回避目標を以下のように捉える。まず、学習目標に関しては、Dweck & Leggett (1988) の定義の内、「対人的経験の獲得」及び「自己の成長」を目指す目標を取り上げ、これらを統合して、「自分とは違った性格や考え方をもち友人と積極的に関わってみるという経験を通して、自己を成長させることを目指す」目標（これを「経験・成長目標」と命名する）とする。対人的経験の中でも、特に、自分とは異なる性格や考え方をもち友だちと関わってその性格や考え方について知る、という経験は、自己（自分の性格や他者理解などの社会的視野）の成長にとって重要であると思われる。また、評価一接近目標及び評価一回避目標に関しては、Dweck & Leggett の理論においては、「パーソナリティや社会的スキルなどといった社会的属性についての良い評価を得ること及び悪い評価を避けること」と定義されているが、本研究では、社会的属性の内、友人関係場面において中学生が関心を示しやすいと思われるパーソナリティ（性格）を取り上げ、「性格について良い評価を得ようとする」評価一接近目標と、「性格について悪い評価を避けようとする」評価一回避目標とする。

本研究の構成は次のようになる。まず、研究1において、これまで作成されてこなかった、経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性について検討する。次

⁴ Dweck & Leggett (1988) や桜井 (1995) は、学業場面の理論を対人関係場面一般に適用できると主張しているが、本研究では対人関係場面の1つである友人関係場面について検討する。

に、研究2において、この尺度を用いて3つの目標と抑うつとの関係を重回帰分析により検討する。特に、評価一接近目標と評価一回避目標が、抑うつに異なる影響を及ぼすかどうかを確かめる。さらに、研究2では、目標志向性と抑うつとの関係に発達差・性差がみられるかどうかを検討する。

研究 1

目的

研究1では、経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。妥当性については、公的自己意識、自尊心、賞賛獲得欲求、関係回避欲求、否定的評価懸念との関係で検討する。予測される関係は次の通りである。

1) 公的自己意識との関係：評価一回避目標及び評価一接近目標は、共に友人からの評価に強い関心を示すため、公的自己意識と高い正の相関を示すであろう。

2) 自尊心との関係：経験・成長目標を持つと、友人関係における経験を自己成長につなげようとするため、高い自尊心を示すであろう。また、高い評価一接近目標を持つ者は、特に自分の性格についての友人からの良い評価に敏感になるため、高い自尊心を持つと予想される。一方、高い評価一回避目標を持つ者は、特に自分の性格についての友人からの悪い評価に敏感になるため、低い自尊心を持つと考えられる。

3) 賞賛獲得欲求との関係：自分の性格について良い評価を得ようとする評価一接近目標が高い者は、他者からの賞賛を獲得しようとする欲求も強いと予想される。

4) 関係回避欲求との関係：自分の性格について悪い評価を避けようとする評価一回避目標が高い者は、他者から否定的に評価されないようできるだけ他者との関わりを避けようとする、つまり、関係回避欲求が高いと予想される。一方、積極的に他者に働きかけ対人経験を獲得していこうとする経験・成長目標が高い者は、関係回避欲求が低いと予想される。

5) 否定的評価懸念との関係：自分の性格についての悪い評価を避けようとする評価一回避目標が強いと、友人からの悪い評価や否定的な反応を気にかける、つまり、否定的評価懸念が高くなると予想される。

方法

被調査者 栃木県内の公立中学校の1年生99名(男子40名、女子58名、不明1名)、2年生114名(男子52名、女子61名、不明1名)、合計213名(男子92名、女子119名、不明

2名)であった。また、再検査信頼性を検討するために、上記の中学生から、1年生87名(男子52名、女子34名、不明1名)、2年生34名(男子17名、女子17名)の合計121名(男子69名、女子51名、不明1名)に対して、約1カ月半の期間を空けて、再度目標志向性尺度を実施した。なお、関係回避欲求尺度を用いた検討に関しては、別の公立中学校の1年生98名(男子44名、女子54名)が、否定的評価懸念尺度を用いた検討に関しては、同じく1年生100名(男子46名、女子54名)が対象となった。

質問紙 目標志向性尺度：経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標を測定する尺度である。それぞれの目標の項目は、学業場面における目標志向性尺度(Elliot & Church, 1997)も参考にしながら、定義を反映するように以下の観点から作成された。まず、経験・成長目標に関しては、①友人関係の中で、自分とは異なった考え方や性格をもつ友人と関わってみるなどといった経験を重視する、②友人関係の中で自己の成長を目指そうとする、という観点から、10項目作成した。次に、評価一接近目標については、①友人に自分の性格の良さを示そうとする、②友人から自分の性格について良く思われようとする、③友人より良い性格をもとうとする、という観点から11項目を作成した。評価一回避目標については、①自分の性格の悪い所を隠そうとする、②友人から自分の性格について悪く思われないようにする、③自分の性格の悪いところを指摘する友人を回避する、という観点から10項目を作成した。評定は「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「すこしあてはまる」(3点)、「とてもあてはまる」(4点)の4段階で求めた。

公的自己意識尺度：桜井(1992)により作成された自己意識尺度の下位尺度(10項目)を使用した。4段階評定で、得点が高い程、高い公的自己意識を表す。

自尊心尺度：海保・山下(1968)と遠藤・安藤・冷川・井上(1974)の自尊感情尺度から12項目を選択した簡易尺度を利用した。4段階評定で、得点が高い程自尊心が高いことを示す。この尺度を因子分析した結果、自己への不安因子(「自分がどんなふうに見られているか心配になりますか」(逆転項目)など8項目)と、自己への自信因子(「自分で正しいと思ったことははっきり言えますか」「人に物事をまかせるよりも、自分でやりたいようにやった方が良いと思いますか」など4項目)に分かれたため、本研究では、後者の4項目を自尊心尺度として使用した。

賞賛獲得欲求尺度：菅原(1986)により作成された尺度(5項目)を使用した。4段階評定で、得点が高い程、当該の欲求が強いことを表す。

TABLE 1 目標志向性尺度項目の因子分析結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F1</i>	<i>F2</i>	<i>F3</i>	<i>h</i> ²
ちがう考え方をもつ友だちとも知り合いになって、いろいろ話をしてみたいです	2.90	.82	.80	.00	.15	.66
自分とは違った考えをもつ友だちの話を、聞いてみたいと思います	2.86	.76	.79	.00	.12	.63
自分とは違った性格をもつ友だちと付き合ってみることも、大切だと思います	2.91	.77	.76	.12	-.01	.60
自分を深めるために、自分とは違った考え方を聞いてみることも大切です	2.92	.74	.72	.01	.00	.53
友だちと言いあらそうことも良い経験になると思います	2.68	.88	.64	.00	.00	.41
友だち関係の中で、自分を成長させていきたいと思います	2.99	.79	.64	.16	.31	.52
友だち関係の中で自分がどれだけ成長していくか、楽しみです	2.79	.82	.58	.20	.27	.45
友だちからどう思われているか気にして何もしないよりも、積極的に友だちに働きかけてみようと思います	2.62	.81	.58	.00	.31	.43
友だち関係の中でいろいろな経験をしていきたいと思います	3.08	.76	.57	-.01	.32	.43
友だちとけんかすることも、自分をみがく良いチャンスだと思います	2.53	.92	.51	.00	.11	.27
自分の性格の悪い所を友だちにみられないようにしています	2.35	.79	.14	.77	.22	.66
いつも、自分の性格について悪く言われるのをさけようとしています	2.54	.82	.00	.75	.17	.59
友だちに悪い印象を与えることだけはさけたいと思います	2.66	.82	.01	.72	.31	.62
自分の性格のいやなところをかくそうと努力しています	2.35	.83	.16	.71	.16	.55
自分のいやなところを友だちに知られないよう努力しています	2.41	.82	.01	.71	.24	.56
自分の性格のいやなところがでしてしまうような状況は、ぜったいにさけたいです	2.60	.84	.01	.68	.21	.51
自分の性格を悪くいられないために、自分をさらっている友だちはさけたいです	2.47	.87	-.01	.63	.00	.40
自分の性格について少しでも悪く言う友だちには近づかないようにしています	2.21	.74	-.01	.59	.14	.37
「他の友だちよりも好感のもてる人である」といわれたいです	2.74	.86	.15	.30	.81	.78
友だちに、自分が好人物であるという印象を与えたいです	2.86	.78	.01	.16	.78	.64
他の友だちより好ましい人でありたいと思います	2.77	.82	.12	.30	.74	.65
みんなから「よい人だ」と言われたいです	2.91	.91	.18	.33	.73	.67
たくさんの方から好かれる性格をもちたいです	3.33	.66	.18	.13	.71	.56
他のどの友だちよりも良い性格をもちたいと思います	2.69	.83	.32	.33	.59	.56
自分が好感のもてる人であることを友だちにアピールすることがあります	2.42	.77	.27	.16	.50	.35
二乗和			4.77	4.43	4.20	13.40
寄与率(%)			19.10	17.70	16.79	53.58

注) *F1*: 経験・成長目標, *F2*: 評価一回避目標, *F3*: 評価一接近目標

関係回避欲求尺度: 渡部 (1999) による対人欲求尺度の下位尺度である回避尺度から, 因子負荷量の低い項目を除いたものを用いた(5項目)。5段階評定で, 得点が高い程, 当該の欲求が強いことを示す。

否定的評価懸念尺度: 松尾・新井 (1998) により作成された対人不安尺度の下位尺度 (7項目) を一部表現を変えて使用した⁵。4段階評定で, 得点が高い程, 否定的評価懸念が強いことを表す。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

結果と考察

目標志向性尺度に対して, 因子分析を行った。初期解を主成分解で求め, 固有値の変化を検討したところ,

⁵ 「自分のことが嫌いな人が1人でもいることはこわいことです」「みんなに笑われるのはこわいです」の下線部がそれぞれ「不安になります」「不安です」に変更された。

⁶ 評価一回避目標用の2項目(「自分の性格について, 友だちから悪く思われないようにしています」「友だちから『いやな人だ』と言われることだけはさけたいです」)と, 評価一接近目標用の4項目(「自分がよい人であることを友だちに示そうとしています」「友だちに自分の性格の良い所をみせようとしています」「自分のことを好人物と考えてくれる人と友だちになりたいです」「自分の性格の良いところを友だちにみせたいです」)が削除された。

第4因子以降に緩やかな減少が示された。そこで3因子を抽出し, バリマックス回転を施した。2つの因子に.35以上の負荷量を示した6つの項目⁶を除いて, 再度同様の因子分析を行った結果をTABLE 1に示す。

因子構造をみると, 第1因子には, 経験・成長目標を査定するために作成された10項目が高く負荷したため, これを経験・成長目標と命名した。第2因子には, 評価一回避目標を査定するために作成された8項目が高い負荷を示したため, 評価一回避目標と命名した。第3因子には, 評価一接近目標を査定するために作成された7項目が高い負荷を示したため, 評価一接近目標と命名した。

TABLE 1に示されている項目で下位尺度を構成し, 下位尺度間の相関を求めたところ, 評価一接近目標と評価一回避目標の間, 及び, 経験・成長目標と評価一接近目標の間に中程度の正の相関が示された(順に, .55, $p<.01$; .46, $p<.01$)。評価一接近目標と評価一回避目標との関係については, どちらの目標も, 友人から性格を評価されることに関心があるという点で共通しているためであろうと考えられる。経験・成長目標と評価一接近目標との関係については, 両者とも高い価値をもつ自己に関心を向けていたり, 友人に積極的に働き

かけるという点で共通しているためであろうと解釈できる。

また、経験・成長目標と評価一回避目標の間に弱い正の相関が示された(.20, $p<.01$)。しかし、両目標が正の相関を示した評価一接近目標の影響をコントロールして偏相関係数を求めてみると、 $-.07(ns)$ であり、両目標はほぼ関係がないと考えられる。

次に、尺度の信頼性を検討するために、下位尺度毎に α 係数を算出したところ、経験・成長目標は.87、評価一回避目標は.87、評価一接近目標は.88であった。さらに再検査信頼性係数を求めたところ、経験・成長目標が.67 ($p<.01$)、評価一回避目標が.73 ($p<.01$)、評価一接近目標が.76 ($p<.01$)であった。 α 係数、再検査信頼性係数ともに十分な値であり、尺度の信頼性は確認されたといえよう。

最後に、妥当性を検討するために、目標志向性尺度と関連する尺度との相関を算出した。目標志向性尺度の下位尺度間に相関が示されたため、他の2つの下位尺度の影響をコントロールした偏相関係数を算出した(TABLE 2 参照)。まず、公的自己意識に対しては、評価一回避目標及び評価一接近目標が正の相関を示した(順に.42, $p<.01$; .21, $p<.01$)。自尊心との関係では、経験・成長目標と評価一接近目標が正の相関(どちらも.18, $p<.05$)を、評価一回避目標が負の相関($-.20$, $p<.05$)を示した。賞賛獲得欲求に関しては、評価一接近目標が高い正の相関(.59, $p<.01$)を示した。関係回避欲求とは、評価一回避目標が正の相関(.41, $p<.01$)を、経験・成長目標が有意傾向の負の相関($-.20$, $p<.06$)を示した。そして、否定的評価懸念に関しては、評価一回避目標が正の相関(.41, $p<.01$)を示した。これらの結果は全て予測を支持するものであり、目標志向性尺度の構成概念妥当性が確認されたものと考えられる。

研究 2

目的

研究2では、経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標が抑うつをどのように予測するかを、重

回帰分析により検討する。さらに、3つの目標と抑うつとの関係に学年差と性差がみられるかどうかについても合わせて検討する。

方法

被調査者 栃木県内の公立中学校の1年生189名(男子79名、女子109名、不明1名)、2年生167名(男子79名、女子87名、不明1名)、合計356名(男子158名、女子196名、不明2名)であった。

質問紙の構成 目標志向性尺度：研究1で作成された尺度を用いた。

抑うつ尺度：欧米においては、Children's Depression Inventory (Kovacs, 1983, 以下 CDI) が十分な信頼性と妥当性を持つ尺度として評価され、子どもの抑うつ研究において頻繁に用いられている(Kazdin, 1990)。そこで本研究では、桜井(1987)により作成された CDI の日本語版を利用することにした。桜井(1987)による尺度は27項目で構成されているが、本研究では、自殺等の表現を含まず、I-T 相関の高い13項目⁷を用いた。被調査者は、抑うつを表す1組3つの文章(例えば、「悲しいときもあった」「何回も悲しかった」「いつも悲しかった」; 合計13組)の中から、2週間くらい前から今日までの間で、自分に最もあてはまるものを1つ選び、○をつけるようになっている。問ごとの抑うつ得点は、3つの文章の中で最も抑うつの程度の低いものが1点、次が2点、抑うつの程度の最も高いものが3点とされた。

手続き 担任教師によって集団で実施された。

結果と考察

まず最初に、学年、男女を込みにして、「目標志向性→抑うつ」という関係について検討した(TABLE 3 参照)。3つの目標を独立変数とし、抑うつを従属変数とした重回帰分析を行ったところ、重回帰式は有意となった($F(3,352)=21.80$, $p<.01$, $R=.40$)。経験・成長目標と評価一接近目標から抑うつに対しては有意な負のパス(順に $\beta=-.28$, $p<.01$; $\beta=-.21$, $p<.01$)、評価一回避目標から抑うつに対しては有意な正のパス($\beta=.29$, $p<.01$)が示された⁸。

次に、学年、男女を別にして、3つの目標と抑うつ

TABLE 2 目標志向性尺度と関連する尺度との偏相関係数

	公的自己意識 ($n=206$)	自尊心 ($n=206$)	賞賛獲得欲求 ($n=209$)	関係回避欲求 ($n=98$)	否定的評価懸念 ($n=100$)
経験・成長目標	-.03	.18*	.10	-.20*	.04
評価一接近目標	.21**	.18*	.59**	.03	.09
評価一回避目標	.42**	-.20*	.17*	.41**	.41**

注) 被調査者の数は欠損値により異なる場合がある。* $p<.10$, ** $p<.05$, *** $p<.01$ 。

⁷ 使用した項目の番号は、1, 3, 4, 7, 10, 11, 12, 19, 21, 22, 24, 26, 27である。各項目の具体的な内容は、桜井(1995)に記されている。

⁸ 3つの目標間に相関が示され、多重共線性の問題が考えられたため、各目標の得点として因子得点を用いて重回帰分析を行ったところ、ほぼ同様の結果が得られた。即ち、抑うつに対して、経験・成長目標と評価一接近目標からは負の有意なパス(それぞれ、 $\beta=-.31$, $p<.01$; $\beta=-.18$, $p<.01$)、評価一回避目標からは正の有意なパス($\beta=.19$, $p<.01$)が示された。

TABLE 3 「目標志向性→抑うつ」の重回帰分析の結果

	抑うつ				
	全体 (<i>n</i> =356)	1年 (<i>n</i> =189)	2年 (<i>n</i> =167)	男子 (<i>n</i> =158)	女子 (<i>n</i> =196)
経験・成長目標	-.28** (-.30**)	-.23** (-.26**)	-.30** (-.31**)	-.34** (-.34**)	-.25** (-.28**)
評価一接近目標	-.21** (-.18**)	-.26** (-.18*)	-.16 (-.17*)	-.21* (-.19*)	-.23** (-.18*)
評価一回避目標	.29** (.11*)	.35** (.18*)	.24** (.07)	.32** (.11)	.29** (.11)
重相関係数(<i>R</i>)	.40**	.41**	.37**	.44**	.38**

注) 数値は標準偏回帰係数を表す。ただし、()内の数値は相関係数を表す。* $p<.05$, ** $p<.01$ 。

との関係を検討した (TABLE 3 参照)。重回帰分析の結果, それぞれ重回帰式は有意となった (1年生, 2年生, 男子, 女子の順に, $F(3,185)=12.63$, $p<.01$, $R=.41$; $F(3,163)=8.43$, $p<.01$, $R=.37$; $F(3,154)=12.20$, $p<.01$, $R=.44$; $F(3,192)=10.69$, $p<.01$, $R=.38$)。標準偏回帰係数についてみると, 2年生における評価一接近目標と抑うつとの関係以外は, 学年, 男女を込みにした結果とほぼ一致していた。評価一接近目標と抑うつとの関係を学年別にみると, 1年生においては有意な負の関係を示したが ($-.26$, $p<.01$), 2年生においては負の方向にはあるもののその関係は有意ではなかった ($-.16$, *ns.*)。

以上の結果を踏まえると, 経験・成長目標は, 学年・男女を問わず, 総じて抑うつを生じにくくさせると考えられる。経験・成長目標が高いと, 自分のもっていない友人の考え方や性格に関心を示したり自分を深めていこうとするため, 友人関係における様々な出来事が経験の獲得や自己成長につながっていき, 自己充実感や自己肯定感をもって生き生きと生活していくことになる (つまり, 抑うつに陥りにくくなる) のであろうと考えられる。また, 友人関係においては相手が自分と違った考えを表すことがしばしばあり, それによってお互いが衝突することもでてくる。そのような時, 自分と相手との違いに気づき, 相手との関係を修復していくことが必要であり, 関係の修復ができず相手との関係をあきらめなければならない時は, 「世の中にはいろいろな人がいるということを知る良い機会だ」とポジティブに考えることが必要となろう。経験・成長目標は, こういった関係の修復やポジティブな認知を促進させるものでもあったと考えられる。

また, Dweck & Leggett (1988) の理論において抑うつをもたらすと仮定されていた評価目標の内, 自分の性格についての悪い評価を避けようとする評価一回避目標は抑うつを生じやすくさせるが, 性格についての良い評価を得ようとする評価一接近目標はむしろ, 抑

うつを生じにくくさせることが示された。菅原 (1996) や Elliot & Harackiewicz (1996) の主張を参考にして解釈すると, 評価一回避目標が高いと, 友人関係における友人の反応や評価の中でも「自分の性格の悪さ」に関する評価により敏感になるため, 傷つきやすく, 抑うつが生じやすくなるのであろうと考えられる。それに対して, 評価一接近目標が高いと, 友人の反応や評価の中でも「自分の性格の良さ」に関する評価により敏感になるため, 抑うつが生じにくくなり, 高い自己肯定感をもつことにつながるであろう。

あるいは, 評価一回避目標が高いと, 相手に嫌な印象を与えないかと懸念するため (研究1の否定的評価懸念との正の相関), 引きこもりの・回避的な行動を多くとる (研究1の関係回避欲求との正の相関) が, 評価一接近目標が高いと, 自分の性格を好ましく見せようとするため, 向社会的な行動 (友人への親切で思いやりのある行動) を多くとるであろうと予想される。引きこもりの・回避的な行動は友人からの拒否をもたらし, 向社会的な行動は友人からの受容を促進する (例えば, Asher & Coie, 1990) ため, 結果として, 評価一回避目標は抑うつを促進するが, 評価一接近目標は抑うつを抑制することになるのかもしれない。

そして, このような評価一接近目標の適応的な効果は, より低い学年において顕著になると考えられる。

青年期においては, 友人が, 個人の自己概念の確立や安定化に大きな影響を与えるといわれている (例えば, 松井, 1990; 岡田, 1995)。特に, 学年が低い程, 自己概念が十分に確立されていないと考えられるため, 友人から良い評価を受けたり, 受容されたりすることは自己肯定感・安定感の獲得や抑うつの低減に大きな影響を及ぼすと考えられる。従って, 学年が低い程, 友人からの良い評価への敏感さや仲間からの受容を促進するであろうと考えられる評価一接近目標をもつことが, 抑うつの低減にとって重要となってくるのではなかろうか。

ところで, 経験・成長目標と評価一接近目標の両方が抑うつと負の関係にあるという結果から, 経験・成長目標と評価一接近目標をうまく調和していくことが, 抑うつの低減に最も効果的であると考えられる。例えば, 友人からの良い評価に関心を示す (評価一接近目標をもつ) だけでなく, 同時に, 自分で自分を深め, ポジティブに評価していこうとする (経験・成長目標をもつ), といったことが重要であろう。Dweck & Leggett (1988) も学業場面における学習目標と評価目標を調和する重要性について論じているが, 友人関係場面においても,

経験・成長目標と評価一接近目標を調和していくことが最も抑うつを抑制すると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、友人関係場面における目標志向性（経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標）と抑うつとの関係について検討した。研究1において、目標志向性を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性が検証された。研究2では、目標志向性と抑うつとの関係を重回帰分析により検討した。その結果、Dweck & Leggett (1988) の仮説通り、経験・成長目標は抑うつを抑制し、評価一回避目標は抑うつを促進するが、Dweck & Leggett の仮説に反して、評価一接近目標は抑うつを抑制することが明らかにされた。そして、評価一接近目標が抑うつを抑制する効果は、2年生よりも1年生において顕著にみられることが示された。

しかしながら、本研究においてはいくつかの問題点もあげられる。まず、本研究は中学1年生と2年生しか対象としていないため、評価一接近目標と抑うつとの関係の発達差について確固とした結論を下すことはできない。今後は学年の幅を広げて検討していく必要がある。

次に、本研究では、3つの目標と抑うつとの関係にどのようなメカニズムが介在するかについては検討しなかった。両者に介在するメカニズムとしては、研究2で考察した通り、他者の肯定的ないし否定的反応への敏感さ (Elliot & Harackiewicz, 1996; 菅原, 1996)、対人行動や対人拒否・受容 (Asher & Coie, 1990; Dykman, 1998)、あるいは、友人からの拒否や葛藤が生じた時の原因帰属 (Dweck & Leggett, 1988; 桜井, 1995)、などが考えられる。今後は、これらも踏まえて、何故目標志向性と抑うつとの関係が本研究の結果のようになったのかを検討する必要がある。

最後に、本研究は横断的な研究であるため、「目標志向性→抑うつ」という因果関係について確証されたわけではない。縦断的な研究により因果関係を検討することも必要であろう。

引用文献

- アッシャー, S.R., & クーイ, J.D. 山崎 晃・中澤 潤 (訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— 北大路書房
(Asher, S. R., & Coie, J. D. 1990 *Peer rejection in childhood*. New York : Cambridge University Press.)
- Dweck, C.S. 1996 Capturing the dynamic nature of personality. *Journal of Research in Personality*, **30**, 348—362.
- Dweck, C.S., & Leggett, E.L. 1988 A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256—273.
- Dykman, B.M. 1998 Integrating cognitive and motivational factors in depression : Initial tests of a goal-orientation approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 139—158.
- Elliot, A.J., & Church, M.A. 1997 A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218—232.
- Elliot, A.J., & Harackiewicz, J.M. 1996 Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation : A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 461—475.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学教育学部教育心理学部門紀要, **18**, 53—65.
- Kazdin, A.E. 1990 Childhood depression. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **31**, 121—160.
- Kovacs, M. 1983 *The children's depression inventory : A self-rated depression scale for school-aged youngsters*. Unpublished manuscript. University of Pittsburgh.
- 海保博之・山下恒男 1968 自尊尺度 (SEI) 作成の試み (I) 日本心理学会第32回大会発表論文集, 338.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斉藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283—296.
- 松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, **46**, 21—30.
- 村田豊久 1993 小児期のうつ病 臨床精神医学, **22**, 557—563.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354—363.
- 桜井茂男 1987 児童の絶望感及び抑うつに及ぼす原

- 因帰属の影響 日本相談学会第20回大会発表論文集, 72—73.
- 桜井茂男 1990 小学生における学習動機と動機づけ傾向の関係 日本心理学会第54回大会発表論文集, 736.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85—94.
- 桜井茂男 1993 大学生における不適応過程の分析II—“評価懸念, 学習目標, 原因帰属様式によるモデル”の検討— 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 138.
- 桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学 風間書房
- セリグマン M.E.P. 平井 久・木村 駿(訳) 1985 うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か— 誠信書房
- (Seligman, M.E.P. 1975 Helplessness : On depression, development, and death. San Francisco : Freeman.)
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人にみられる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 134—140.
- 菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル 相川充・津村俊充(編) 社会的スキルと対人関係 誠信書房 Pp.111—128.
- 高野清純 1995 感情の発達と障害 福村出版
- 渡部玲二郎 1999 対人関係能力と対人欲求の関係 心理学研究, **70**, 154—159.

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご助言頂きました筑波大学心理学系、杉原一昭教授、新井邦二郎教授に心より感謝致します。また、本研究に快くご協力頂きました中学校の校長先生をはじめとする諸先生方及び生徒のみなさんに、深く感謝致します。

(2000.7.12 受稿, 12.11 受理)

Relation Between Goal Orientation in Peer Relationships and Depression Among Preadolescents

YUJI KURODA (DOCTORAL PROGRAM IN PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND

SHIGEO SAKURAI (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 129—136

In the present investigation of the relation between depression and goal orientation in peer relationships among seventh and eighth graders, 3 kinds of goal orientations were examined : interpersonal experience/growth (the goal of developing oneself by acquiring interpersonal experiences), performance-approach (the goal of obtaining positive personality evaluations in peer relationships) and performance-avoidance (the goal of avoiding negative personality evaluations in peer relationships). In study 1, a new scale of goal orientation in peer relationships was shown to have sufficient reliability and validity. In study 2, the relation between depression and goal orientation was examined by means of a multiple regression analysis. The results indicate that the interpersonal experience/growth goal is negatively related with depression, while the performance-avoidance goal is positively related, supporting Dweck & Leggett's (1988) model. However, in contrast to their model, the performance-approach goal was negatively related to depression. The results also suggest that the negative relation between depression and performance-approach goal is stronger for seventh graders than for eighth graders.

Key Words : goal orientation, peer relationship, depression, preadolescent